［同志社大学］

幕末からの京都の歴史を知る茶室「寒梅軒」
―同志社大学茶道部創部90周年へとつづく―

塚越 一彦　同志社大学理工学部教授

1 キャンパスに馴染む茶室

2025年に同志社は創立150周年を迎える。1876(明治9)年、同志社英学校が仮校舎から移転してきた今出川キャンパスには、歴史と伝統が刻まれている。室町時代には三代将軍足利義満が開いた京都五山の一つ相国寺の塔頭(鹿苑院など)があった。また江戸時代末には薩摩藩二本松屋敷が存在し、まさに古都、京都を象徴する場所にキャンパスがある。

現在、同志社大学今出川キャンパスには、彰栄館、礼拝堂、ハリス理化学館、クラーク記念館、有終館の5つの煉瓦造りの重要文化財が建ち並ぶ。京都で有数の歴史的景観を形成している。

今出川通り沿いにある正門から今出川キャンパスに入ると、右手にクラーク記念館が見えてくる。その先、クラーク記念館の北側に茶室「寒梅軒」がある。先の5つの重要文化財も含め、キャンパス内の建物の多くは赤煉瓦を基調とした外観で、洋風の雰囲気である。その中にありながら、「寒梅軒」は不思議と違和感を抱かせない。

2「寒梅軒」幕末からの歩み

幕末の頃、二条斉敬公が関白となったときに、それを祝って叔父の水戸烈公こと徳川斉昭が殿舎を今出川通寺町西入(現在の同志社女子大学今出川キャンパスの場所)に新築した。このとき廊下の端に建てられたのが「寒梅軒」である。

1954(昭和29)年、同志社女子大学の校舎増築のため同志社大学のキャンパスに移転された折、裏千家14代淡々斎宗匠によって、同志社英学校創立者新島襄の漢詩から「寒梅軒」と命名された。1968(昭和43)年には、大学図書館新設のため、現在の場所であるクラーク記念館北側に移築。その折に茶室と水屋に加えて、広間の増築が行われた。

3「寒梅軒」の佇まい

茶室の前には苔むした露地がある。楓や椿が季節を教

えてくれる。向かって左手から、茶室、水屋、広間になる。水屋の円窓の障子に、庭の木々の葉影がうつり、蹲踞（つくばい）の水が苔の緑に映える。

広間は時に、待合に使われる。茶室へは、一旦広間から露地に出て、向かって左手側の貴人口から入る。茶室は、4畳半で、中央の半畳に炉が切ってある。貴人口から、左手に床の間と床脇（とこわき）があり、右手奥が茶道口になっている。茶室の南側の障子が露地に面している。障子に映る葉影や日差しの強さ、優しさが、茶室を自然との融和へと導く。

4 同志社大学茶道部の活動

「寒梅軒」を拠点とする同志社大学茶道部の活動を紹介する。茶道と同志社の関わりは極めて古く、新島襄の妻八重夫人が裏千家13代家元円能斎宗匠に入門したことに始まる。

1936（昭和11）年、14代家元淡々斎宗匠を中心として、同志社の予科の教員と学生が集まり「同風会」が発足した。茶道を通じ心の安らぎを求めるこの集いから、同志社大学茶道部が産声を上げた。やがて日本は太平洋戦争に突入し、茶道部は活動停止を余儀なくされた。戦後は、15代家元鵬雲斎宗匠のご尽力により、飛躍的に活動の輪を広げていく。

現在、部員は約40名、ほぼ毎日、「寒梅軒」には釜が掛かり、学生たちが稽古に励んでいる。今年8月には、京都の地を離れて名古屋市（「御懐石志ら玉」）で特別茶会が、10月には京都市北区眞如寺で同志社茶会が開かれた。その他にも京都のいろいろな茶室を借りて、一回生茶会、二回生茶会が開催され、「寒梅軒」では初釜、七夕茶会、EVE茶会（学園祭茶会）等が催される。

また、千玄室大宗匠（15代家元鵬雲斎宗匠）のご指導、ご支援を受けて、ハワイ大学茶道部との交流も長く、何度も同志社大学茶道部の部員がハワイ大学を訪れており、昨年はハワイ大学の茶道部員が、同志社大学を訪れた。「寒梅軒」での一服のお茶が、学生の国際交流の和を結んだ。

幕末からの京都を知る茶室「寒梅軒」の歴史は、今、同志社大学茶道部創部90周年（2026年）へとつづいている。

参考資料：同志社大学茶道部公式HP「関守石」（https://dochado7.wixsite.com/dochado7）

寒梅軒

［駒澤大学］

「而今庵」—いま、この時の茶—

小川 隆　駒澤大学禅研究所所長・総合教育研究部教授

「茶湯は禅宗より出でたるによりて、僧の行いを専らにす。珠光、紹鷗、悉く禅宗なり」（『山上宗二記』）。

利休の弟子、宗二がこう記すように、茶の道は古くから禅と結びつけて修められてきた。禅宗の一派、曹洞宗の創立にかかる駒澤大学に、長い伝統を誇る茶道部と由緒ある茶室があるのも、ごく自然なことと言えるだろう。

駒澤大学の深沢校舎に「而今庵」という茶室がある。もとは1957年、日本橋三越のなかに「樹庵」という名で造られたもので、その名が示すとおり、各種各様の銘木をふんだんに用いた点が特徴となっていた。それが、1999年、駒澤大学に譲渡されて現在の場所に移築され、当時の松田文雄総長によって、あらたに「而今庵」と命名されたのであった。

「而今」は「現在、ただ今」の意の近世の中国語で、「如今」ともいう。もとはごくふつうの中国語であったが、道元がこの語に独自の哲学を読み込んだことで、「而今」は禅のことばとなった。

道元は言う。「この時節、かつてさきにあらず、さらにのちにあるべからず。ただ而今のみにあるなり」（『正法眼蔵』看経）。真実は、過去でもなく、未来でもなく、常に、ただ、現在の一点にのみある。また、いわく、「而今を自惜して、我身を古仏心ならしめざることなかれ」（同・古仏心）。過去の延長でもなく、未来の前段でもない、今、この一刹那に生きて在る自己、それをよく護惜して、我が身が常に古仏の心そのままでありつづけるようにせよ。

これらの語の背後には、道は恒常不変の実体として存在するものではなく、今、この場の履践によって、一瞬一瞬、不断に実現されつづけてゆくものだとする考えがある。だが、そこで踏み行われるべき道は、決して特殊な難行苦行の類ではない。日常茶飯の営み、それを「古

仏の心」の営みとして、一つひとつ心をこめて行うのである。道元は言う。「おほよそ仏祖の屋裡には、茶飯これ家常なり。この茶飯の儀、ひさしくつたはれて而今の現成なり。このゆゑに、仏祖茶飯の活計きたれるなり」（同・家常）。日常茶飯の営み、それははるか昔から受け継がれてきた仏祖の道が、ただ今、この瞬間、活きたはたらきとしてこの場に実現されているものなのだ、と。

深沢校舎には庭園をそなえた日本館があり、そのなかにも茶室がある。ふだん茶道部の稽古に使っているのはそちらだが、そこで行ぜられているのも、やはり、この「而今の現成」としての茶にほかならない。駒澤大学の茶道部は折々に参禅部と合同の活動を行っており、学内外の研修や国際交流の催しでも、しばしば、坐禅体験と茶道体験とが一組のプログラムとして提供されている。「仏祖茶飯の活計」は、今日も、駒澤大学の奥深くで、静かに、しかし途切れることなく息づいているのである。

「而今庵」外観

「而今庵」内部

「而今庵」内部

［南山大学］

芸処名古屋と南山大学茶室の顛末

安田 文吉　南山大学名誉教授

南山大学には2棟の茶室がある。1棟は横井也有由縁の「也有の席」、もう1棟は旧名古屋茶道クラブの「方寸庵」。この2棟は、南山大学が名古屋市昭和区五軒家町の杁中キャンパスから同区山里キャンパスに移転した際に建てられたものだ。新キャンパスは名古屋の東山地区と言われる丘陵地の一角にあり、その斜面の緩やかな勾配を利用して建てられた。併せて、灌木の雑木林を整備して、茶室の庭に似つかわしいように、垣根を作り、飛石や燈籠を配した。

尾張名古屋は芸処。種々多彩な芸能が盛んである。茶道もその一つだが、名古屋の抹茶文化は日本一と言われる。富裕層ばかりでなく、庶民の間にも深く広く浸透している。当地では午前10時と午後3時に抹茶タイムがあり、この時間になると近所の人が集まってきて、抹茶を飲んで団欒を楽しんでいる。そのため饅頭の生産高も日本一だそうだ。

そもそも名古屋の町は、徳川家康が清須からお城を名古屋に移し、碁盤割の城下町を作った（所謂「清須越」である）。武家は勿論寺社も商家もここに移し、尾張藩の拠点としたところから始まった。京の町の影響を受けて、武士も町人も共に活動する賑やかな町となった。

江戸時代、能楽と茶道は武家の嗜みであった。尾張藩でも、織田信長の弟有楽斎の創流した茶道の流派・有楽流を藩の流義として盛んに行った。武士だけでなく町人の間にも広がると、宗和流の中島正員、千家流の町田秋波らが京都から名古屋に下り、富裕な町人に広めた。さらに、名古屋の大商人伊藤治郎左衛門（松坂屋の祖）や高田太郎庵らが京に上り、作法を修めて名古屋に帰り、諸流の「茶の湯」を流行させた。その中で、千家流原叟の門人松尾宗二は、名古屋に下って松尾流を興した。この子孫が南山大学へ茶室を寄贈することになる。松尾流は今も名古屋では最大の流派である。

横井也有は尾張藩士で、初め、七代藩主名君徳川宗春公に仕えた。1696（元禄9）年生まれの宗春の6歳年下。禄高は千五百石。1741（寛保元）年尾張藩大番頭兼用人となり、後には寺社奉行をも兼ねた。也有は号、本名横井孫右衛門。俳諧、詩歌、狂歌、謡曲、書画、平家（平曲）琵琶等、文学・芸能に堪能で、平曲（平家琵琶）の奏者としては、専業の盲人に劣らない腕前であったという。また、俳諧にも優れ、その俳文書「鶉衣（うずらごろも）」は大田南畝（おおたなんぽ）によって、也有没後に刊行された。宗春治下の名古屋では、経済活動が活性化し、武士も町人も農民も豊かになっていたので、文芸活動も茶道も隆盛を極めたと思われる。

茶室「也有の席」は、也有の門弟の俳人「宮地幽篁由（みやちゆうこうゆ）縁（かり）の書斎」といわれ、時代を経て、東区長塀町の土井国丸氏の邸内に移され、「木菟庵（みみずくあん）」と称された（『NANZAN UNIVERSITY BULLETIN』1967・1・9）。「茶室建設資金募集趣意書」には「……横井也有の住んでおられた『也有の席』」とある。

一方「方寸庵」とは、元々千利休の師武野紹鷗（じょうおう）の子で、秀頼に仕えた者の号。その名を継ぐこの茶室は、尾張茶道と縁が深い。紹鷗の孫瀧新右衛門は織田有楽斎・尾張初代藩主徳川義直に仕えていたためである。

これら二棟は名古屋の伝統文化を継承し、世帯に広めるのに恰好の施設として、次世代へ残していくことが決まった。移築再建の際の趣意書にも、以下のように書かれている。「南山学園創立母体の神言会創立九〇周年という記念すべき年でもあり、在学生修得の場として、また、国際親善の場として活用するべく、諸外国から来訪される多くの人々に、この茶室を通して、日本人の美しい心境が広く海外に伝えられる様に、二棟を移築・再建するので、ご援助をお願いする」。発起人は、南山大学友の会会長松尾宗吾氏、同副会長髙橋半治郎氏、南山大学後援会会長平松茂禧氏の3名。因みに松尾宗吾氏は現松尾流家元松尾宗典氏の祖父だ。

その結果、1966（昭和41）年完成し、釜をかけて客を招いたのは同年6月4日だった。その後、松尾・表千家・裏千家流の3流派のクラブがここで修業し、毎年12月には、南山ならではの「クリスマス茶会」を催している。

再建後、白蟻の被害で2度の大修理が必要だったが、現在は、キャンパスの大整備の時に庭園も整備され、伝統文化の殿堂として、ますます存在感を増している。